



社長の人格

100年企業創り合同会社

小野 知己・日高 安則(文責)・林 浩史

1. 今回の着眼点

“企業は人なり”あるいは“企業は社長の器以上に大きくならない”という言葉は、当然ファミリー企業にも当てはまります。

この言葉は、発展する良い会社や滅亡する悪い会社があるのではなく、良い社長や悪い社長がいるだけだということを示しています。

つまり、企業の死生・存亡は、究極のところ社長の双肩だけにかかっているということです。ことファミリー企業においては、社長そのものがすべての判断基準であり、会社で起こるすべての責任は社長にあります。これまで解説してきたとおり、社長の夢に家族や社員が共感しているか、組織内での信頼関係や上質なコミュニケーションの構築ができていかなど、企業の発展は社長の人間性によるところが大きいと言えるのではないのでしょうか。

そこで、シリーズ「小企業・ファミリー企業のマネジメント」の最後として、企業の死生・存亡を左右する『社長の人格』について考えてみます。

なお、人格という概念は様々な解釈があります。

ここでは、「人格とは、独立した個人としての人間性、その人固有の人間としてのありかた、人柄であり、人間の成長の過程により形成される」という定義で使います。

※本寄稿文においては、社員＝家族以外の社員を指す。

2.ファミリー企業の社長が陥る一般的な誤解

(1) [誤解 その1] 社長はみんなに好かれていなければならない

お人好しの社長に多い誤解です。

お人好しは、何事も善意にとらえる傾向があり、他人に利用されたりだまされたりしやすい人です。好意的に言えば、気が良い人・まじめな人・純粋な人などで、冷笑的に言えば、相手に合わせるだけの人・優柔不断な人・なめられやすい人などでしょう。

お人好しな社長は、もし家族や社員から嫌われると、「言うことを聞かなかつたり、無視されたり、ふて腐れたり…」するかもしれないし、酷くなると「逆切れ」され、仕事に差し障りが出るかとも思い、好かれなければならないと考えて無理な努力をします。物理的にも、心理的にも距離の近いファミリー企業であれば、なおさら周囲の顔色を伺ってしまうのです。

言いたいことも言わず、厭味なことを言われても、いつもニコニコ笑顔を絶やさないようにするだけで、これでは、単なる“お人好し”つまり、“いい人”で終わってしまいます。

(2) [誤解 その2] 社長としてふさわしい趣味・嗜好を持つことが尊敬に繋がる

趣味などを通じて尊敬されようとする社長に多い誤解です。

尊敬とは、「その人の人格を尊いものと認めて敬うこと」、「その人の行為・業績などを優れたものと認めて、その人を敬うこと」という意味です。“尊”には値打ちや、位が高いという意味があり、“敬”には身を謹んで他人をうやうやしくするという意味があります。

趣味などに対してこだわりを持ち、その道にのめり込み“玄人肌(プロ級)”まで追究することが、社長としてのある種のステータス、自分の値打ちを上げることになり、社員からの尊敬が集められると勘違いしていることがあります。

これでは、文化人ではあっても、みなが尊敬する社長にはなりません。